

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第33輯

主要地方道泉佐野・岩出線建設に伴う

# 岡中西遺跡

— 発掘調査報告書 —

1 9 8 8

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第33輯

主要地方道泉佐野・岩出線建設に伴う

# 岡中西遺跡

— 発掘調査報告書 —

1 9 8 8

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



1. 岡中西遺跡遠景（北から）



2. 岡中西遺跡近景（北から）

## 序 文

泉州の各市毎に関西新空港関連アクセス道路として、山手を走る近畿自動車道松原海南線と、海手を走る国道26号線あるいは施工中の阪神高速道路湾岸線を結ぶ新設改良道路が建設されつつあり、本協会では、昭和60年以来逐次、事前に文化財調査を実施しているところです。

本遺跡も泉南市域での関西新空港関連アクセス道路の一つで、従前から男里遺跡や幡代遺跡については注意されてきたが、本遺跡の存在については全く存知されておらず、工事中に新たに発見されたものです。新規発見に伴う緊急調査は大阪府教育委員会が泉南市教育委員会の全面的な協力を得て実施したもので14～15世紀の石敷、池状遺構、井戸、ピット等が発見されています。

今回の調査は、以前の調査の隣接地にあたるもので調査の結果については本報告書に詳しく記述しているところでありますが、先の調査を補完するもので、特に井戸とセットとなる掘立柱建物跡や紀州とのつながりを窺わせる「根来の白土器」系土器の検出等が注目されます。

本報告書が、岡中西遺跡のみならず、地域の中世史解明の端緒として大いに利用されることを願って止みません。

最後に、調査の実施にあたり種々ご配慮いただきました大阪府土木部岸和田工事事務所をはじめとする関係者各位に謝意を表すると共に、特に、貴重な人材を直接派遣いただいている近畿府県教育委員会、並びに大阪府下市町教育委員会、各位に対し深謝申し上げます。

昭和63年12月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

## 例　　言

1. 本書は、主要地方道泉佐野・岩出線（金熊寺・男里線）建設予定地内に所在する岡中西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第一班が担当し、技師岡本圭司・有井宏子が現地調査にあたった。調査は昭和63年6月16日に着手し、同年8月31日に終了した。引き続いて実施した報告書作成作業には、有井宏子があたった。
4. 現地調査の実施および整理作業にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所、泉南市教育委員会および地元関係各位の協力を得た。記して感謝の意を表する。
5. 遺構写真撮影は調査担当者が、遺物写真撮影は小倉勝が担当した。
6. 遺構番号は、遺構を検出した順に通し番号で与えている。また、遺構は、当協会が独自に定めた「発掘調査規定」に基づいて略称で表現している。この報告書で使用した遺構の略称は次のとおりである。

O B : 掘立柱建物 O O : 土坑 O P : ピット O Y : 池

複数のピットで構成される掘立柱建物については、そのピット番号のうち、最小のものを代表させて遺構番号としている。

7. 本書で記述した土層及び時の色調の記述については、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帳 5版』（1976年）を使用した。
8. 個々の遺構について、実測図の縮尺は、掘立柱建物・池状遺構が1/80、他の遺構は1/40である。
9. 遺物実測図の縮尺は、土器が1/4、石器が1/2、金属製品が原寸である。
10. 遺物実測図の断面は、瓦器・瓦質土器は黒塗り、他の遺物は白抜きとしている。

# 目 次

## 第一章 調査経過

第一節 調査に至る経過	1
第二節 調査方法	2
第三節 遺跡の位置と概況	3

## 第二章 遺跡の環境

第一節 地理的環境	4
第二節 歴史的環境	5

## 第三章 調査成果

### 第一節 層序

1 基本層序	9
2 包含層出土遺物	11

第二節 遺構	13
--------	----

第四章 まとめ	27
---------	----

# 挿入図版目次

第1図 泉南市位置図	1
第2図 地区割模式図	2
第3図 地形分類図	4
第4図 周辺遺跡分布図	7
第5図 基本層序模式図（1）	9
第6図 基本層序模式図（2）	10
第7図 第1層出土石匙	11
第8図 元豊通寶	11
第9図 第2層出土遺物	12
第10図 第3層出土遺物	12
第11図 第4層出土遺物	13

第12図	2-O B .....	14
第13図	2-O B 出土遺物 .....	14
第14図	遺構配置図 .....	15~16
第15図	6・8-O O 出土遺物 .....	17
第16図	11-O O .....	17
第17図	17-O O .....	18
第18図	18-O O .....	18
第19図	19-O O .....	18
第20図	22-O O .....	19
第21図	24-O O .....	19
第22図	29-O O .....	20
第23図	30-O O .....	20
第24図	31-O O .....	20
第25図	35-O O .....	21
第26図	43-O Y .....	22
第27図	43-O Y 断面図 .....	22
第28図	43-O Y 出土遺物 (1) .....	23
第29図	43-O Y 出土遺物 (2) .....	24
第30図	43-O Y 出土遺物 (3) .....	25
第31図	43-O Y 下層出土遺物 .....	26

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡名一覧 .....	8
-----	---------------	---

## 図 版 目 次

卷頭図版 1 岡中西遺跡遠景（北から）

2 岡中西遺跡近景（北から）

図版 1 遺跡全景

図版2 1 A区全景（東から）

2 B区全景（南東から）

図版3 1 A区土層断面

2 段丘礫層上面遺物検出状況

図版4 1 2-OB検出状況（北から）

2 2-OB掘り上がり（北から）

図版5 1 2-OBピット断面（北から）

2 B区土層断面（北西から）

図版6 1 6-OO

2 17-OO

3 18-OO

4 19-OO

図版7 1 22-OO

2 24-OO

3 31-OO

4 35-OO

図版8 1 43-OY遠景（西から）

2 43-OY近景（西から）

図版9 1 43-OY部分（西から）

2 43-OY張り出し部（西から）

図版10 1 43-OY石積みの状況（西から）

2 43-OY遺物検出状況（北西から）

図版11 1 43-OY遺物検出状況（西から）

2 43-OY石敷上面遺物検出状況（北から）

図版12 包含層出土遺物（1）

図版13 包含層出土遺物（2）

図版14 遺構内出土遺物（39：8-O P 40～45, 60～62：43-O Y）

図版15 遺構内出土遺物（47～59：43-O Y 64：43-O Y石敷下層）



# 第一章 調査経過

## 第一節 調査に至る経過

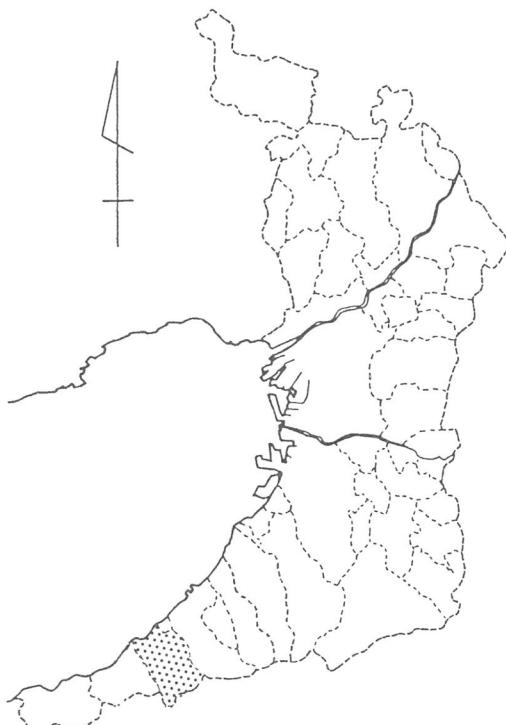
現在、関西国際新空港の造成に伴なって、近畿自動車道和歌山線の建設が進められている。これに付随していくつかの道路の建設が予定されているが、そのひとつが今回の調査対象地である主要地方道泉佐野・岩出線（金熊寺・男里線）である。岡中西遺跡は、この道路予定地、泉南市信達岡中地内に所在する。

従来、ここでは遺跡の存在は知られていなかった。ところが、1987年に行なわれた道路の擁壁工事に際して泉南市教育委員会が石敷を発見し、遺構の存在を確認した。そこで泉南市教育委員会が、1987年度に両側の擁壁および3本の用水施設設置予定地を中心に部分的な調査を行なった。その結果、

調査区の北端で、丸石を利用した石敷および石列・池状遺構を、調査区中央付近の用水施設設置予定地において井戸・ピットを検出した。石敷からは15世紀初頭を中心とする中世の遺物が大量に出土している。石列および池状遺構はこの石敷の下層で検出されたものである。井戸からは14世紀後半の遺物を検出している。この井戸から出土した遺物の中には、「急々如律令」等の文字を記した木製のまじない札が含まれていた。

このあとを受けて、当協会が全面的な調査の実施をした。現地調査は、1988年6月16日に開始し、

同年8月31日に終了した。

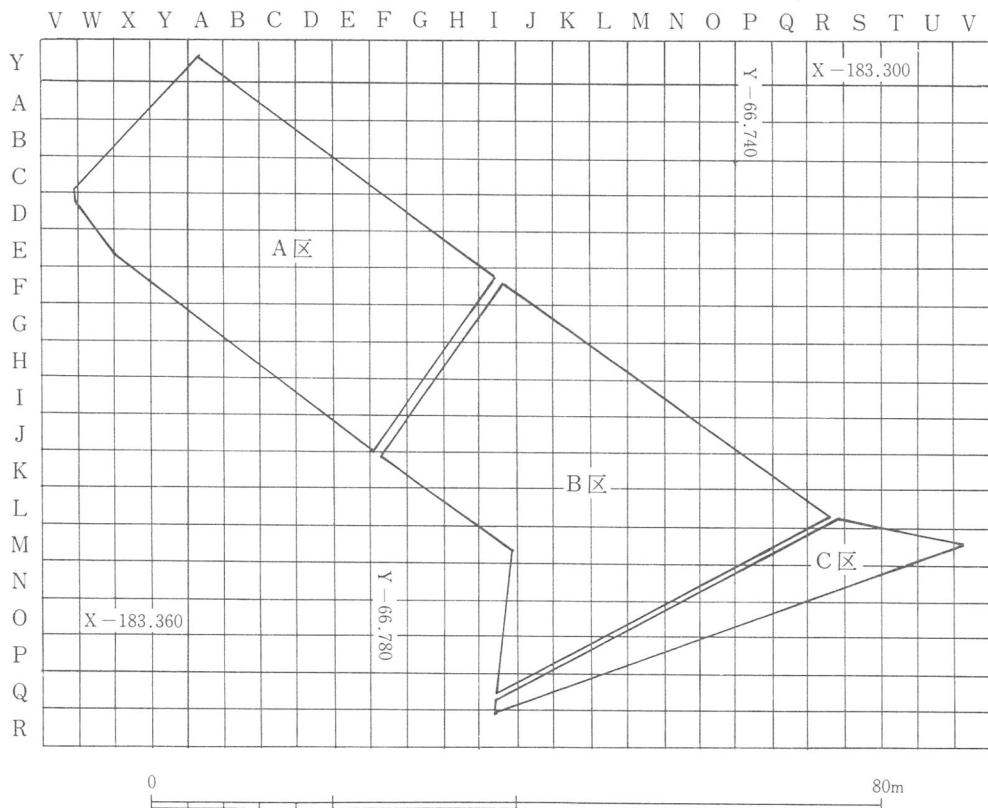


第1図 泉南市位置図

## 第二節 調査方法

調査区の地区割、遺物の取り上げ方法、各地区的名称、遺構番号のふり方、遺構の略称など、調査成果の基本的な整理方法は、すべて当協会の定める発掘調査規定によっている。この点に関しては、例言において個別に説明している。

地区割りの基本は、大阪府発行新版（昭和59年建設省国土地理院承認）の1/2500地形図である。今回の調査区は、この大B-2-7に位置する。これを、500m×500mのメッシュに12等分してA～Lの記号を与え、これをさらに100m×100mに細分し、01～25の番号を与える。さらに4m×4mの区画に細分する。遺物取り上げの基本はこの4m×4mのメッシュで、各地区的名称はこのメッシュの北西角のX座標、Y座標の値によって、それぞれアルファベット順に与えられる。なお、座標値は第VI座標系によっている。この方法に基づく当遺跡に地区割は下のとおりである。



第2図 地区割模式図

なお、調査対象地は、先述した道路建設に伴なう用水施設の設置によって三分割されている。そこでこれらの3つの区画を北からA、B、C区と名付けた。当報告書においてもこの名称を使用している。

### 第三節 遺跡の位置と概況

岡中西遺跡は、大阪府泉南市信達岡中地内に所在する中世の遺跡である。泉南市は、大阪府の南端近くに位置し、北は大阪湾に向かい、南は和歌山市と接している。東は泉佐野市、西は阪南町に隣接している。泉南市も、府下の他の市と同様、昭和40年代後半から50年代前半にかけて市街化が急速に進行した。特に東南部丘陵の大規模な宅地造成はほとんどこの時期に行なわれている。近年は丘陵部もほぼ開発しつくされ、平坦部の開発が進められている。今回の調査地も、この開発の一環として造成される道路の予定地である。

岡中西遺跡は、金熊寺川の沖積作用によって形成された谷底平野と、山地から急斜面で続く低位段丘との境目の上に立地している。調査地は、南西方向から北東方向に向かってゆるやかな傾斜をもち、泉佐野・岩出線の造成工事にはいる前には、畑・水田として利用されていた。当協会が調査に着手した時点では、道路の両側の擁壁および3本の用水施設はすでに完成しており、それ以外の場所では耕土が除去され、一部を除いて厚さ0.2~0.5mの盛土が施されていた。

調査の結果、擁壁造成工事に際して、北東側擁壁からは約10m幅、南西側擁壁からは約4m幅で、段丘礫層上面まで全面に削平をうけていることが明らかになった。特にA区の北西端では攪乱が著しく、泉南市教育委員会の調査で検出された遺構はすべて消滅している。また、B区では、A区との境界線となっている用水施設から約18m幅で包含層および遺構が遺存したのみで、それ以外の部分は段丘礫層中まで全面的に削平をうけている。C区は全体が段丘礫層中まで完全に削平をうけている。最終的には、調査対象地の約2/3が旧来の地形を失っていることが判明した。

#### ＜参考文献＞

- 1) 『泉南市史 資料編』（1982年 泉南市史編纂委員会編）
- 2) 『土地分類調査（細部調査）－現況調査編－報告書』（1987年 泉南市編）

## 第二章 遺跡の環境

### 第一節 地理的環境

泉南市の地形的な特徴としては、山地斜面から丘陵地、低位段丘へ続く部分に急斜面が発達し、緩やかな斜面がほとんどみられないことが挙げられる。和泉山脈を源とする河川は、急斜面を下り、平野部で扇状地状の地形を形成して海へと向かう。泉南市の西端近くでは南東方向から北西方向に向かって2級河川の男里川が流れているが、この川の一次支流に金熊寺川がある。金熊寺川は、山地部を深く開析して市域内の主要水系を形成している。当遺跡は、この金熊寺川の西岸に位置し、扇状地の始まりの部分にあたる。標高は、T.P. 24.9~25.7mである。



第3図 地形分類図

## 第二節 歴史的環境

岡中西遺跡の周辺で今までに行なわれた発掘調査によって、この地域の歴史を知るうえで重要な遺跡がいくつか確認されている。

海嘗宮池遺跡では、表採資料ではあるが、サヌカイト製の木葉形尖頭器がみつかっている。この石器はおよそ1万年前のものと考えられている。また、弥生時代前後のものとおもわれるサヌカイト製石鏃も表採されている。縄文時代の確実な遺物としては、フキアゲ山東遺跡から前期に属する土器が、男里遺跡から晩期の滋賀里式土器が出土している。この他には、寺田山遺跡、玉田山遺跡で石器が採集されている。

弥生時代の初めでは、縄文時代終末から弥生時代前期にかけての土器が共伴することで知られる船岡山遺跡が注目される。男里遺跡では、弥生時代中期中葉から後葉の遺物が出土している。ここでは、中期の木棺墓や竪穴住居址などの遺構もみつかっており、確実に人の居住した痕跡がみうけられる。また、愛宕山山中の林昌寺では、扁平紐式四区袈裟縄文銅鐸が出土している。向井山遺跡では、弥生時代中期後葉の方形周溝墓が検出され、新家オドリ山南遺跡では中期後葉から後期の集落址を検出しており、丘陵上に生活の場があつたことを物語っている。中期末から後期には、滑瀬遺跡が出現する。当遺跡は独立丘陵上に営まれており、高地性集落と考えられている。

さきに述べた男里遺跡においては、双子池および上池の周辺で弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての遺物も出土している。古墳時代前期の遺構は、船岡山遺跡で竪穴式住居が検出されているのみである。5世紀末葉になると、丘陵の尾根上にフキアゲ山古墳群が形成される。この遺跡は、泉南市域で確認されている最古の古墳群であり、木棺直葬の主体部をもつ古墳2基が確認されている。6世紀に入ると、新家古墳群、下村古墳群、高田山古墳群、玉田山古墳群などの小規模な群集墳が成立する。

飛鳥から奈良時代にかけての遺跡として最も目を引くのは、海会寺である。海会寺では山田寺式の軒丸瓦が多数出土しており、その創建は7世紀後半頃と考えられている。また、ここでは7世紀から9世紀前半にわたる集落の存在が確認されている。しかし、この他には男里遺跡で奈良および平安時代の掘立柱建物が検出されている程度である。

中世に関しては、男里遺跡で掘立柱建物3棟を検出している。また、幡代遺跡でも中世の遺物および遺構を検出しているが、明確な集落址は、いまのところ確認されていない。ただし、中世寺院は数多く建立されており、神光寺、光平寺、平野寺、林昌寺、仏性寺、

岡本廃寺などの存在が知られている。

<参考文献>

- 1) 『泉南市史 資料編』 (1982年 泉南市史編纂委員会編 泉南市)
- 2) 『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第12輯 (1942年 大阪府)  
『男里遺跡発掘調査報告書』泉南市文化財調査報告書 第二集 (1978年 泉南市教育委員会)  
『男里遺跡発掘調査報告書 II』泉南市文化財調査報告書 第三集 (1981年 泉南市教育委員会)  
『男里遺跡発掘調査報告書 III』泉南市文化財調査報告書 第四集 (1982年 泉南市教育委員会)
- 3) 西山要一「泉南市双子池遺跡採集の遺物」『会報』 (1971年 和泉古代文化研究会)
- 4) 「日本住宅公団新家団地内 泉南市向井山遺跡発掘調査報告」『泉南市文化財調査報告 1971-1』  
(1972年 泉南市教育委員会)
- 5) 『船岡山B地点発掘調査報告書 84-3区の調査』 (1985年 泉佐野市教育委員会)
- 6) 『滑瀬遺跡発掘調査報告書』大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第10輯 (1987年 大阪府教育委員会・  
大阪府埋蔵文化財協会)
- 7) 『玉田山古墳発掘調査概要』 (1961年 玉田山古墳発掘調査団)
- 8) 『海会寺』海会寺遺跡発掘調査報告書 (1987年 泉南市教育委員会)
- 9) 『神光寺跡発掘調査報告書』 (1982年 阪南町教育委員会)
- 10) 『泉南市遺跡群発掘調査報告書 V』泉南市文化財調査報告書 第十五集 (1988年 泉南市教育委員会)
- 11) 『大阪府文化財分布図』 (1986年 大阪府教育委員会)



第4図 周辺遺跡分布図（縮尺は5万分の1）

第1表 周辺遺跡名一覧表

No.	遺 跡 名	種 類	時 代	No.	遺 跡 名	種 類	時 代
1	皿田池遺跡	散 布 地	古 墳 時 代	24	北 野 遺 跡	集落跡	平 安 時 代
2	神 光 寺 跡	寺 院 跡	平 安 時 代	25	一 丘 神 社 遺 跡	散 布 地	弥 生・古 墓 時 代
3	蓮 池 遺 跡	散 布 地	縄 文 時 代	26	海 会 寺 跡	寺 院 跡	白 凤 時 代
4	石 田 山 遺 跡	散 布 地	縄 文 時 代	27	海 営 宮 池 遺 跡	散 布 地	縄 文 時 代
5	岩 崎 山 遺 跡	散 布 地	縄 文 時 代	28	向 井 池 遺 跡	集落跡	弥 生 時 代
6	寺 田 山 遺 跡	包 含 層	縄 文 時 代	29	孤 池 遺 跡	散 布 地	弥 生 時 代
7	玉 田 山 古 墓 群	古 墓	古 墓 時 代	30	船 岡 山 遺 跡 C 地 点	包 含 層	縄 文 時 代 晚 期
8	玉 田 山 遺 跡	散 布 地	縄 文 時 代	31	夫 婦 池 遺 跡	散 布 地	弥 生 中 期 ~ 古 墓
9	天 神 ノ 森 遺 跡	散 布 地	古 墓 時 代	32	船 岡 山 遺 跡 B 地 点	包 含 层	縄 文 晚 期 ~ 歷 史
10	男 里 遺 跡	集 落 跡	弥 生 時 代 中 期 ~ 後 期	33	船 岡 山 遺 跡 A 地 点	集 落 跡	弥 生 時 代 ~ 歷 史
11	光 平 寺 遺 跡	寺 院 跡	平 安 後 期	34	田 尻 遺 跡	散 布 地	古 墓 時 代
12	平 野 寺 遺 跡	寺 院 跡	平 安 時 代	35	岡 本 废 寺 跡	寺 院 跡	平 安 後 期
13	幡 代 遺 跡	集 落 跡	中 世	36	船 岡 山 南 遺 跡	包 含 层	弥 生 時 代
14	高 田 山 古 墓 群	古 墓	古 墓 時 代	37	道 池 遺 跡	包 含 层	弥 生 ~ 歷 史 時 代
15	前 田 池 遺 跡	包 含 层	古 墓 時 代	38	樺 井 城 跡	城 跡	室 町 時 代
16	雨 山 遺 跡	散 布 地	弥 生 時 代	39	新 家 オドリ 山 東 遺 跡	散 布 地	弥 生 時 代 ?
17	雨 山 南 遺 跡	散 布 地	弥 生 時 代	40	下 村 2 号 墓	古 墓	古 墓 時 代
18	岡 中 西 遺 跡		平 安 後 期 ~ 中 世	41	新 家 オドリ 山 遺 跡	集 落 跡	弥 生 時 代 中 期 ~ 後 期
19	岡 中 遺 跡	寺 院 跡 ?	平 安 後 期 ~ 中 世	42	新 家 オドリ 山 南 遺 跡	散 布 地	弥 生・古 墓 時 代
20	林 昌 寺 跡	寺 院 跡	平 安 時 代 後 期	43	新 家 古 墓 群	古 墓	古 墓 時 代
21	林 昌 寺 銅 鐸 出 土 地		弥 生 時 代 後 期	44	フ キ ア ゲ 山 西 遺 跡	散 布 地	古 墓 時 代
22	滑 瀬 遺 跡	集 落 跡	弥 生 時 代 中 ・ 後 期	45	引 谷 池 窯 跡	窑 跡	奈 良 時 代
23	仏 性 寺 跡	寺 院 跡	平 安 後 期	46	諸 目 遺 跡	散 布 地	古 墓 前 期

# 第三章 調査成果

## 第一節 層序

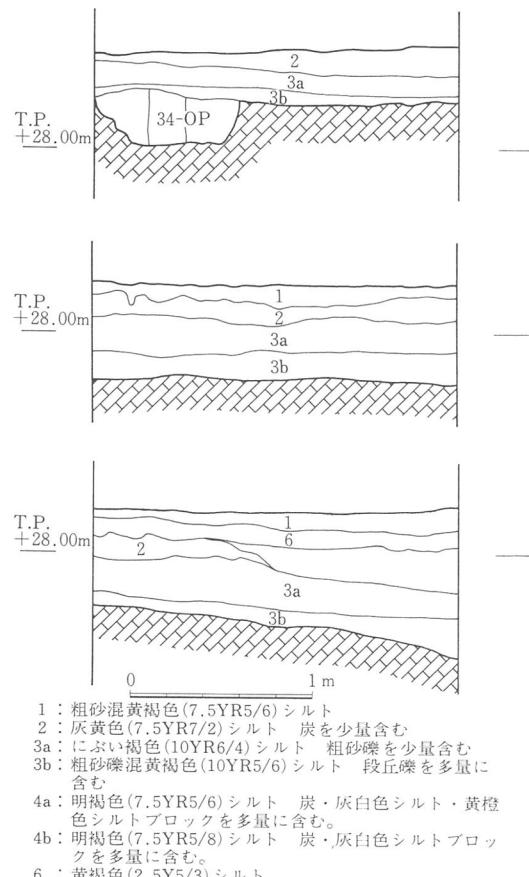
### 1 基本層序

層序の観察は、必要に応じて設定したアゼで行なった。削平を免れた部分でみられる基本的な土層は、調査地北端の石敷部分を除くと、最終遺構面に達するまで大きく5層に分層できる（ただし、現在の盛土層は除く）。

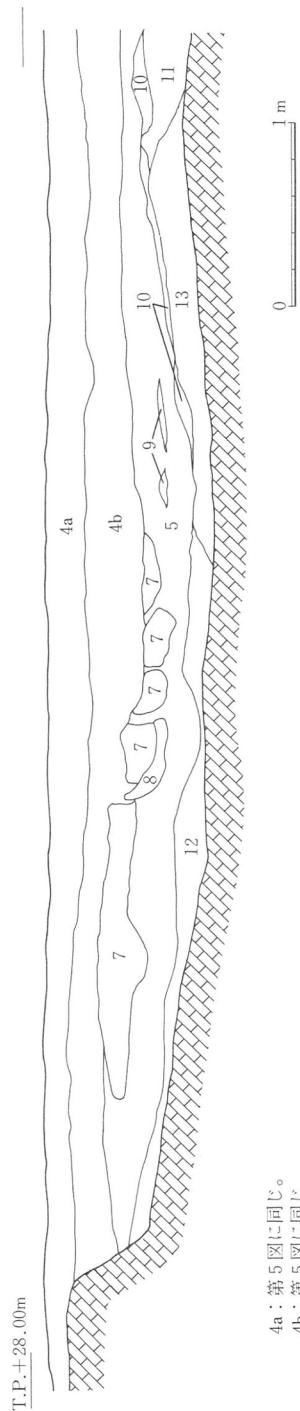
**第1層** 粗砂混黄褐色（7.5YR5/6）シルト層で、現代耕作土の床土にあたるものである。A区においては2～20cmの厚みで堆積しており、耕作の影響をたびたび受けていると考えられる。B区では、道路造成に伴なう整地で耕土が除去された際にほぼ全面的に削平されている。

**第2層** 灰黄色（7.5YR7/2）シルト層で、炭の微細なブロックを少量含む。B区からA区にかけて、10～25cmの厚みでほぼ水平に堆積している。ただし、A区内の低位段丘から沖積地に移行する境界付近で、後述する第4層に切られて消滅する。

**第3a層** にぶい褐色（10YR6/4）シルト層で、粗砂および拳大の段丘礫を少量含む。また、炭・焼土の微細なブロックが若干含まれている。さきに述べた低位段丘と沖積地の境界付近までは、A・B区ともに約20cmの厚みでほぼ水平に堆積している。この境界付近から徐々に堆積が薄くなり、段丘崖の裾部で消滅する。



第5図 基本層序模式図（1）



第6図 基本層序模式図（2）

第3 b層 粗砂礫混黄褐色 (10YR

5/6) シルト層で、拳大から20cm程度の段丘礫を多量に含む。これは、段丘礫層の隙間に第3 a層のシルトが落ち込んで形成された層であり、第3 a層同様、段丘崖裾部で消滅する。

第4 a層 明褐色 (7.5YR5/6) シ

ルト層で、炭の微細なブロック及び灰白色 (7.5Y7/1) および黄橙色 (10YR7/6) シルトのブロックを非常に多く含む。これらのブロックのうち、黄橙色シルトは、段丘面に遺存している掘立柱建物を構成するピットの掘方埋土と同一である。この層は人為的に埋め戻して形成されたと考えられ、A区の沖積地のみでみられる。

第4 b層 明褐色 (7.5YR5/8) シ

ルト層で、炭の微細なブロック・灰白色 (7.5Y7/1) シルトのブロックを多く含むが、黄橙色シルトはみられない。この層も埋め戻し土であり、沖積地のみ、みられる。

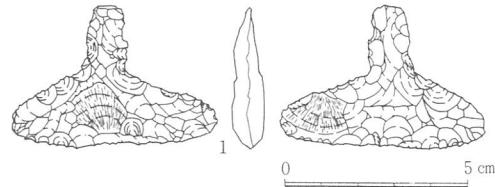
第5層 褐色 (7.5YR4/6) 粘質シ

ルトで、細砂を多く含み、下にいくほど粘性が強くなる。間層として細砂・粗砂・砂礫のラミナーがみられ、旧河川の自然堆積層であることが分かる。この層からは遺物が出土していない。この層の下は明青灰色 (5B7/1) 粘土の地山である。

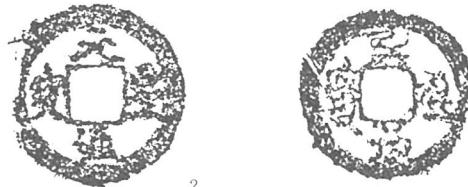
## 2 包含層出土遺物

第1層出土遺物（第7図、図版-1） この層は、耕作に伴なう整地が繰り返されたらしく、遺物のはほとんどが細片となっている。主な出土遺物は近世陶磁器・瓦および中世の瓦器・土師器であるが、舶載の青磁碗とみられる細片も数点出土している。また、完形の横型石匙が1点出土している。これはサヌカイト製で、刃部長は5.30cm、両面ともに剥離調整を施して刃部を作り出している。

なお、泉南市教育委員会が検出した石敷を埋め戻した土の中から、銅錢3枚が固着した状態で出土している。（第8図）。銅錢は直径2.3～2.5cm、厚さ1mmで、方形の孔をもつ。文字の読み取れる2枚はどちらも「元



第7図 第1層出土石匙

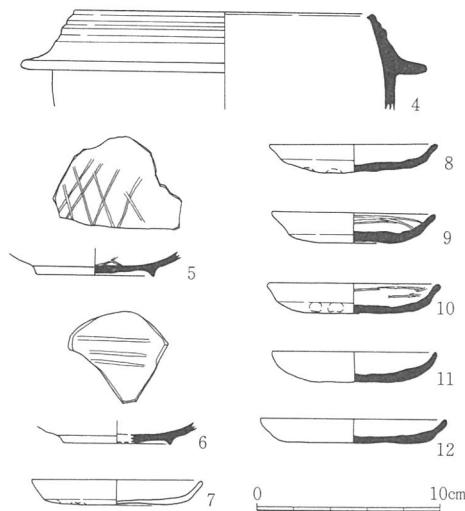


第8図 元豊通寶（実寸）

豊通寶」（2・3）である。2は行書体、3は篆書体を用いている。「元豊通寶」は元来、初鋳が元豊元（1078）年の北宋錢である。しかし、今回出土したものは、鋳上がり、文字の書体からみて模鋳錢と思われる。特に3は、その書体からみて、万治二（1659）年から貞享2（1685）年にかけて鋸造された本邦模鋳錢であろう。

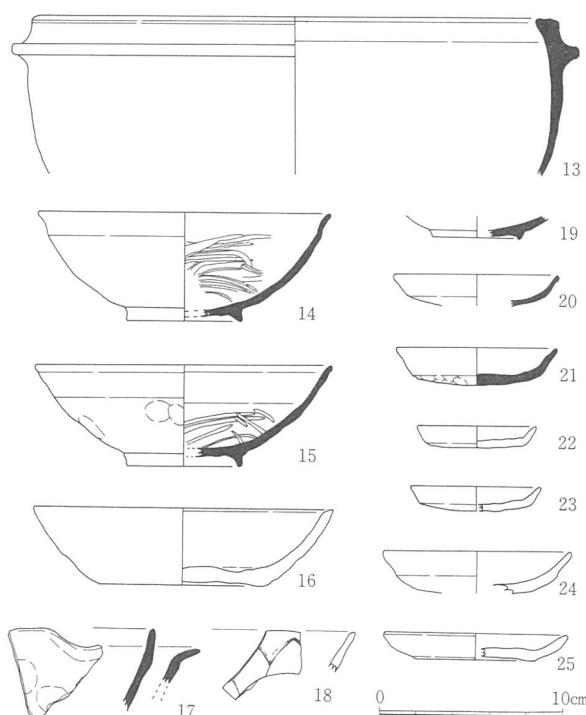
第2層出土遺物（第9図、図版12・13） 4は瓦質の羽釜である。これは口径16.5cmと比較的小型で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、外面に段を巡らせ、端部を平らに仕上げている。鍔の端部は平らに仕上げている。5・6は瓦器碗底部である。5は、残存高が1.4cm、底径が6.4cmである。高台は断面が三角形を呈し、底部内面に斜格子の暗文を施す。6は、残存高1.2cm、底径が5.9cmである。高台はかなり粗雑な作りで、底部内面に平行線の暗文を施す。7は土師小皿である。口径8.0cm、器高が1.2cmである。8～12は瓦器小皿である。口径は9.0～10.2cm、器高は1.3～1.7cmである。底径は大きく、平らである。口縁部は丸みを帯びながら内湾気味に立ち上がる。9は口縁部内面に圈線状の暗文を施す。10は底部内面に圈線状の暗文を施す。この他に、舶載の青磁碗および美濃瀬戸系の天目碗の細片や平瓦、常滑甕の破片が少量出土している。

第3層出土遺物（第10図、図版13） 13は土師質羽釜である。口径27.8cm、残存高8.6cmである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、鍔の端部は平らに仕上げている。14・15・19



第9図 第2層出土遺物

は瓦器碗である。14は口径15.8cm、器高5.90cmである。口縁部は外反し、内面に圈線状の暗文をほどこし、高台は断面が三角形を呈する。15は口径16.0cm、器高5.5cmで、口縁部がやや内傾気味に立ちあがる。内面体部に圈線状の暗文をほどこし、高台は断面がやや方形に近い三角形を呈する。19は底部のみで、高台は断面が三角形を呈する。16は土師器碗である。口径16.2cm、器高は4.3cmである。17は瓦質の片口付鉢である。18は龍泉窯系の青磁碗で、外面に蓮弁文を施している。20・21は瓦器小皿である。20は口径8.8cm、残存高は1.7cmで、内面体部に圈線状の暗文をほどこしている。21は口径8.7cm、器高2.1cmで、内面底部に平行線の暗文を施している。22～25は土師質皿である。22は口径が6.4cm、器高1.2cm、23は口径が7.00cm、器高1.4cmの小皿である。24は口径10.2cm、残存高2.3cmの中皿である。22～24は和歌山県根来寺出土資料に代表される「根来の白土器」系である。25は口径10.0cm、器高1.5cmで、底部外面に糸切り痕をもつ。



第10図 第3層出土遺物

第4層出土遺物（第11図、図版12・13） 26・27は黒色土器の底部である。26は残存高1.7cm、底径が6.8cmで、内面のみに炭素が吸着している。27は残存高1.3cm、底径が6.0cmである。26に比べて、高台の立ち上がりが高く、器壁がうすい。内外面ともに炭素が吸着している。28・29は土師皿で、胎土が精良で器壁が白く、「根来の白土器」系に属する。この系統の土師皿は、大小の二種類に分けうる。30は瓦器碗で口径15.4cm、器高4.9cm、内面体部に圈線状の、見込み部に放射線状の暗文を施す。31は青磁碗の底部で、残存高は2.8cm、底径が4.6cmである。明緑灰色の釉を施し、外面に蓮弁文、見込み内面に篦描による花文を施す。32は瓦質の摺鉢で、口径24.9cm、残存高5.1cmである。外面にはヘラケズリを施し、口縁部付近のみ、ナデを施している。

## 第二節 遺構

43-OY以外の遺構は、すべて段丘礫面で検出している。ここでは、検出番号順に遺構の概要を述べることとする。

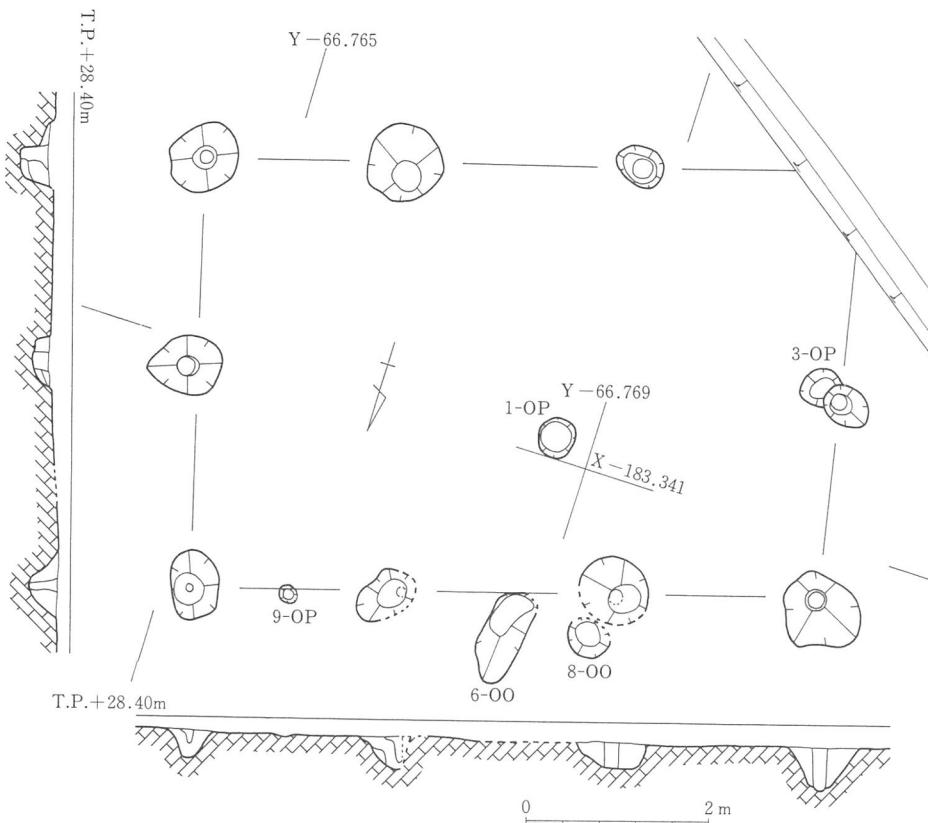
1-OO（第12図） C18KHに位置する土坑である。平面形は円形を呈し、直径45cm、深さは最大で10cmである。埋土は黄褐色シルト（10YR5/6）である。遺物は、瓦器・土師器の細片を検出したのみである。

2-OB（第12図、図版4・5） C18KHに位置する掘立柱建物である。方位はN-16°-Wである。一部が調査区域外にかかっているが、梁行2間（4.65m）×桁行3間（6.85m）の規模を持つと考えうる。この建物に伴なうピットは全部で9検出した。これらのピットは平面形が不整な円形を呈し、直径45~85cm、深さ25~45cm、柱根の直径は10~25cmである。掘方の埋土は黄橙色シルト（10YR7/6）で、炭・地山礫を若干含む。柱痕はにぶい褐色シルト（7.5YR5/3）で、炭を若干含む。

この遺構を形成するすべてのピットから遺物が出土している。遺物の大半は瓦器と土師器の細片であるが、瓦質の羽釜・瓦器碗・土師皿が含まれていることを確認した。

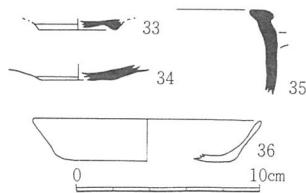
(第13図)。34は羽釜の口縁部で、鍔が剥離している。32・33は瓦器椀の底部で、高台は退化してすりつけただけとなっている。35は土師皿で、口径12.4cm、残存高2.3cmである。

3-O O (第12図) C18KHに位置する土坑で、4-O Oに切られている。残存している部分の最大径は45cm、深さは15cmである。埋土は黄橙色シルト(10YR8/8)である。



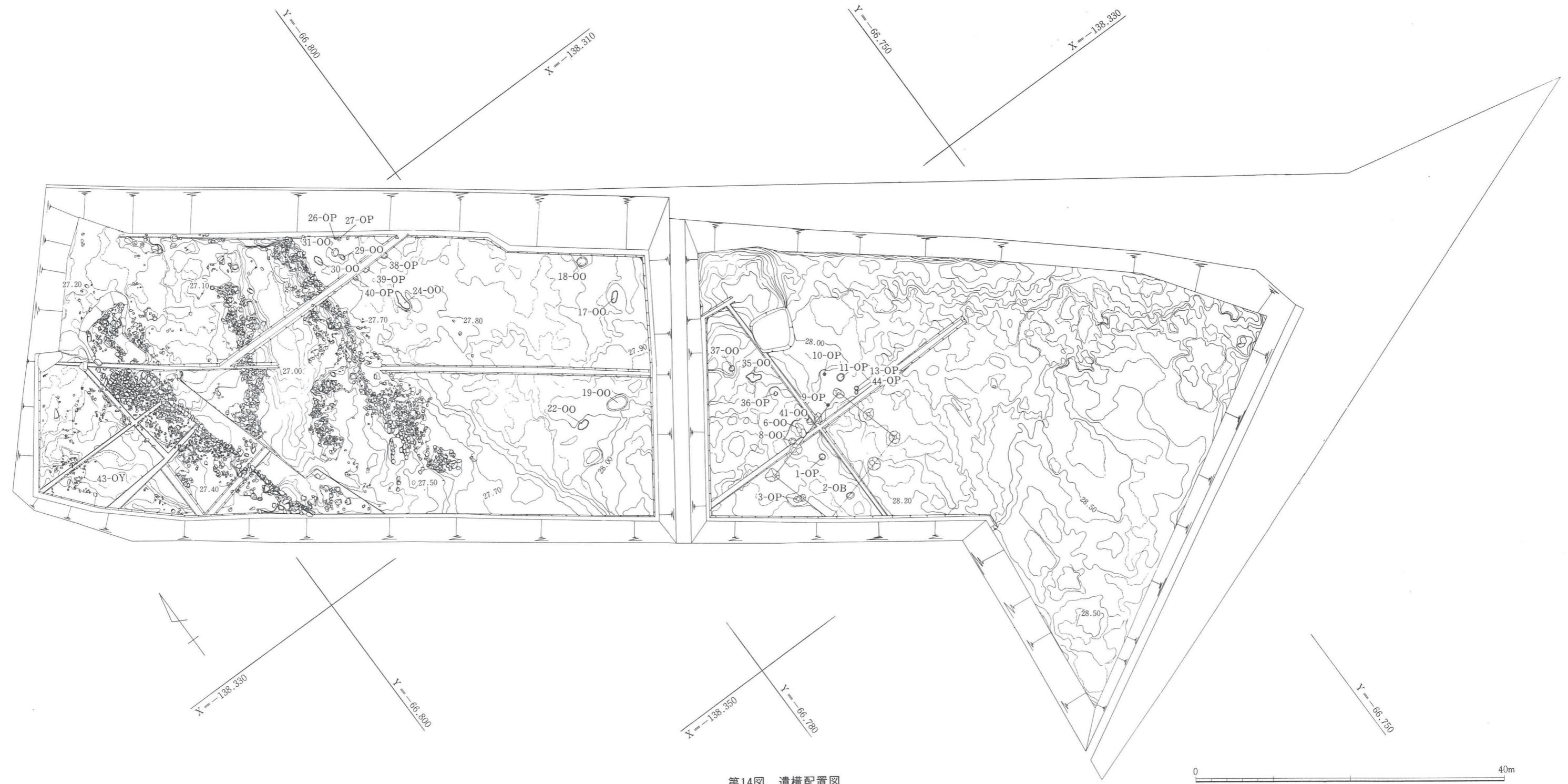
第12図 2-O B

遺物は瓦器の細片が出土しているのみである。



第13図 2-O B 出土遺物

41-O P 側溝によって切られているため、全容は不明であるが、平面形が不整な円形を呈するピットと考えている。残存部最大径は50cm、深さは最大で15cmである。埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルトで、炭を少量含んでいる。



第14図 遺構配置図

遺物としては瓦器椀と思われる細片が出土したのみである。

6-OOO (第12図、図版6-1) C18JHに位置する土坑である。側溝によって南端を切られているが、平面形は不整な橢円形を呈すると考えられる。長径1.05m、短径0.45mである。埋土は黄橙色シルト(10YR7/6)で、炭を若干含む。これは、2-OBの掘方埋土と同じである。

遺物は瓦器椀・白磁椀が出土している(第15図-37・38)。36は瓦器椀の底部で、高台は退化してすりつけただけとなっている。37は白磁椀の底部付近で、内外面ともに透明な釉を施している。

8-OOO (第12図) C18JHに位置する土坑である。側溝で南端を切られているが、平面形は円形を呈すると考えられる。遺存している部分の最大径は45cm、深さは20cmである。埋土は黄橙色シルト(10YR7/6)で、炭を若干含む。この埋土は2-OBの掘方埋土と同じである。また、直上で土師質皿が据えられた状態で出土していることから、この土坑は2-OBの地鎮に関係するものと考えられる。

出土遺物は、瓦器椀の細片および先に述べた土師質皿である(第15図-39)。これは口径16.4cm、器高3.1cmの大型品で、「根来の白土器」の系統に属する。

9-OP (第12図) C18JIに位置するピットである。平面形は円形を呈し、直径は20cm、深さは最大で10cmである。埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルトで、炭の微細なブロックを若干含む。遺物は瓦器・土師器の細片のみである。

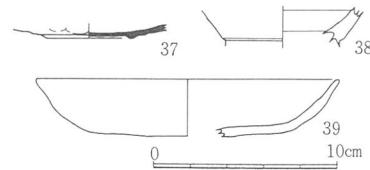
10-OP C18JIに位置するピットである。平面形は円形を呈し、直径20cm、深さは最大で10cmである。埋土は黄褐色シルト(2.5Y5/6)で、炭を若干含む。

遺物は出土していない。

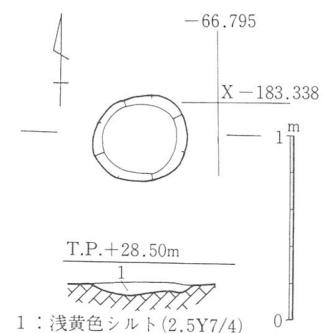
11-OO (第16図) C18JIに位置する土坑である。平面形は円形を呈し、直径は50cm、深さは最大で10cmである。埋土は浅黄色シルト(2.5Y7/4)で、炭を少量含む。

遺物は出土しなかった。

13-OO C18JIに位置する土坑である。平面形は円形を呈し、直径は30cm、深さは最大で15cmである。埋土は



第15図 6・8-OOO出土遺物



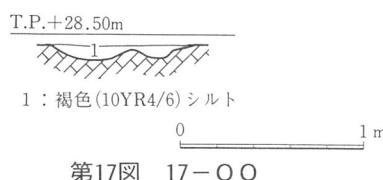
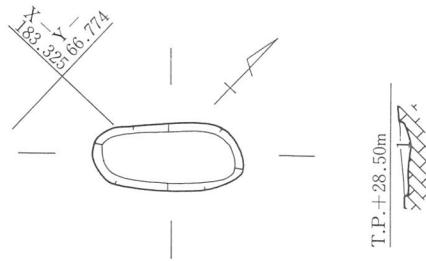
第16図 11-OO

黄褐色（2.5Y5/6）で、炭を若干含む。

遺物は、瓦器の細片を検出したのみである。

44-O O C18J I に13-O O に接して位置する土坑である。平面形は円形を呈し、直径は30cm、深さは最大で20cmである。埋土は黄褐色シルト（2.5Y5/6）で、炭を若干含む。遺物は出土しなかった。

17-O O (第17図、図版6-2) C18G G に位置する、平面形が橢円形を呈する土坑である。長径は80cm、短径は35cmである。床面に凹凸があり、深さは最大で10cm、最小で

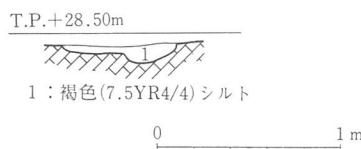
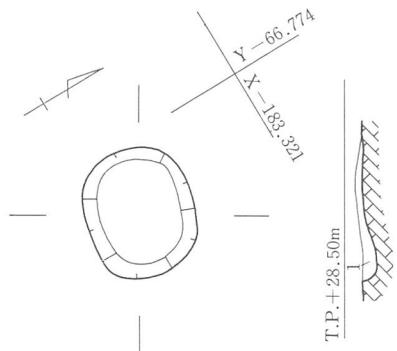


第17図 17-O O

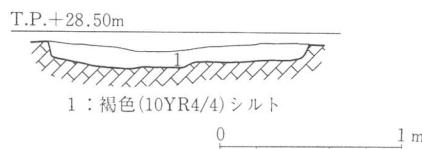
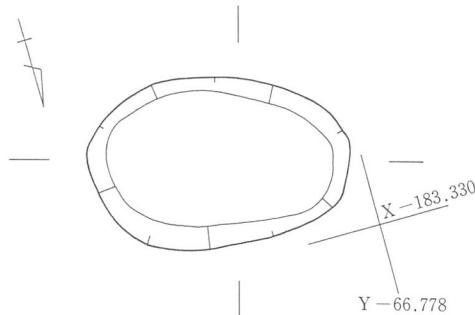
5cmである。埋土は褐色（10YR4/6）シルトで、炭・焼土の微細なブロックを若干含む。床面の石の一部には火を受けた痕跡がみられる。しかし、床面自体は焼けしまっておらず、長期間にわたって使用されたとは考えにくい。

遺物は出土していない。

18-O O (第18図、図版6-3) C18F G に位置する、平面形が円形を呈する土坑である。直径は60cmである。床面には凹凸があり、深さは最大で10cm、最小で5cmであ



第18図 18-O O



第19図 19-O O

る。埋土は褐色(7.5YR4/4)シルトで、炭・焼土の微細なブロックを多く含む。ただし、17-O Oとは違って、床面には火を受けた痕跡を認めない。

遺物は、土師皿の細片を検出している。

19-O O (第19図、図版6-4) C18G Gに位置する、平面形が橢円形を呈する土坑である。長径は145cm、短径は90cmである。深さは最大で10cmである。埋土は褐色(10YR4/4)シルトで、炭を多量に含む。ただし、床面には火を受けた痕跡を認めない。

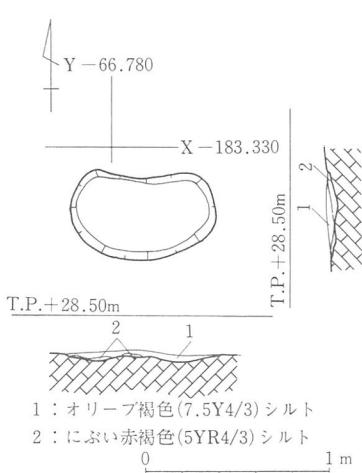
遺物は、瓦器・土師器の細片を検出したのみである。

22-O O (第20図、図版7-1) C18H Fに位置する、平面形が不整な橢円形を呈する土坑である。長径は80cm、短径は40cmである。深さは最大で5cmである。埋土はオリーブ褐色(7.5Y4/3)シルトである。床面に火を受けた痕跡があり、この部分はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈する。ただし床面は焼けしまってはおらず、長期にわたって使用されたものではないと考えられる。

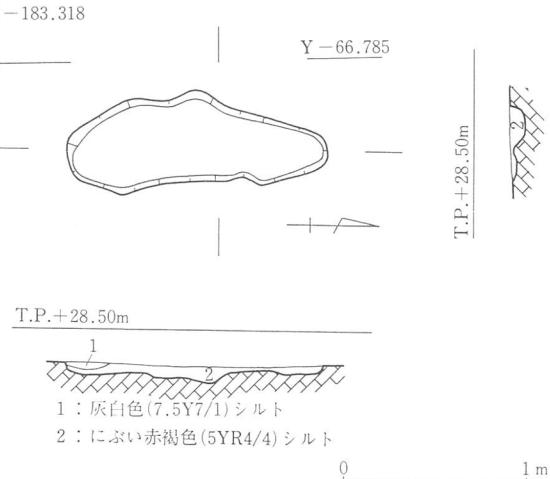
遺物は、瓦器・土師器の細片を検出したのみである。

24-O O (第21図、図版7-2) C18E Dに位置する土坑である。平面形は不整な橢円形を呈する。長径は140cm、短径は45cmである。深さは最大で10cmである。埋土はにぶい赤褐色(5YR4/4)シルトで、炭・焼土の微細なブロックを若干含む。また、地山の礫の多くに火を受けた痕跡がみられるが、床面自体は少しも焼けしまっていない。おそらく、上面で焚火をした程度の使用状況が考えられる。

遺物は、瓦器・土師器の細片を検出しており、この中に瓦器椀高台の破片がみられる。



第20図 22-O O



第21図 24-O O

26-O P C18C Dに位置するピットである。側溝に切られているが、残存部最大径は30cm、深さは最大で20cmである。埋土は黄橙色(10YR7/6)シルトで、これは2-O Bの掘方埋土と同一である。

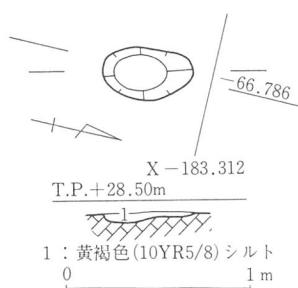
遺物は、瓦器・土師器の細片を検出したのみである。

27-O P C18C Dに位置するピットである。側溝および26-O Pに切られている。残存部最大径は25cmで、深さは最大で20cmである。柱痕がみられる。掘方の埋土は黄橙色(10YR7/6)シルトで、2-O Bの掘方埋土と同一である。柱痕の埋土は黄褐色(10YR5/6)シルトで、炭・焼土の微細なブロックを含む。

遺物としては、瓦器碗の小片が出土しているのみである。

28-O P C18C Dに位置するピットである。側溝によって切られており、上層の盛土が崩落する危険があったため、断面観察のみにとどめた。残存部最大径は20cm、深さは最大で15cmである。埋土は褐色(10YR4/6)シルトである。

29-O O (第22図) C18D Dに位置する土坑である。平面形は、細長い橢円形を呈する。

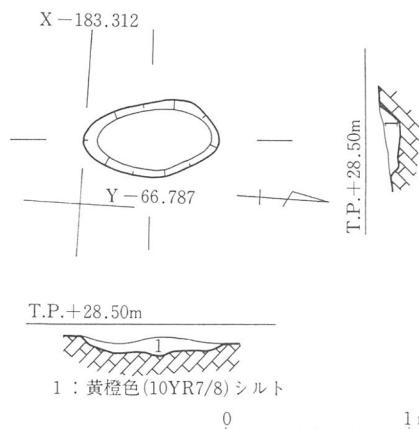


第22図 29-O O

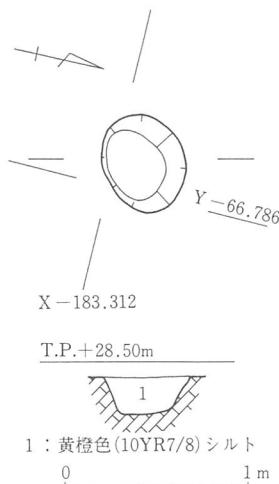
長径は50cm、短径は30cmである。深さは最大で5cmである。  
埋土は黄褐色(10YR5/8)シルトで、炭・焼土塊が若干混じるが、床面には火を受けた痕跡を認めない。

遺物は、瓦器の細片を検出したのみである。

30-O O (第23図) C18C Dに位置する土坑である。平面形は不整な円形を呈する。長径75cm、短径40cm、深さは最



第23図 30-O O



第24図 31-O O

大で10cmである。埋土は黄橙色(10YR7/8)シルトである。

遺物は、瓦器・土師器の細片を検出したのみである。

31-O O (第24図、図版7-3) C18CDに位置する土坑である。平面形は橢円形を呈する。長径は55cm、短径は45cmである。深さは最大で20cmである。埋土は黄橙色(10YR7/8)シルトで、炭・焼土の微細なブロックの他、地山礫を若干含む。ただし、床面には火を受けた痕跡が認められない。

遺物は瓦器・土師器の細片を検出したのみである。

35-O O (第25図、図版7-4) C18JHに位置する、平面形が不整形の土坑である。最大径は105cm、深さは最大で10cmである。埋土は黄褐色(10YR5/6)シルトで、炭・焼土の微細なブロックを若干含む。ただし、床面には火を受けた痕跡は認められない。

遺物は出土していない。

36-O O C18JHに位置する、平面形が円形を呈する土坑である。直径は30cm、深さは最大で5cmである。埋土は黄褐色(10YR5/6)シルトである。

遺物は、瓦器・土師器の細片を検出したのみである。

37-O O (第26図) C18IHに位置する、平面形が円形の土坑である。直径は40cm、深さは最大で10cmである。埋土は明黄褐色(2.5Y6/6)シルトである。

遺物は出土していない。

38-O P C18DDに位置するピットである。側溝に切られており、残存部最大径は50cm、深さは最大で10cmである。埋土は褐色(10YR4/6)シルトで、28-O Pと同一である。

遺物は出土していない。

39-O P C18DDに位置するピットである。側溝に切られており、残存部最大径は50cm、深さは最大で20cmである。埋土は褐色(10YR4/6)シルトで、28-O Pと同一である。

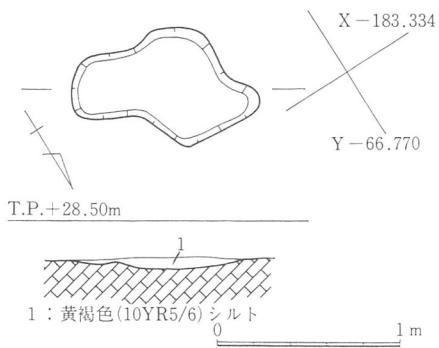
遺物は出土していない。

40-O P C18DDに位置するピットである。側溝に切られており、残存部最大径は30cm、深さは最大で25cmである。埋土は褐色(10YR4/6)シルトで、28-O Pと同一である。

遺物は出土していない。

41-O O C18JHに位置する土坑である。

東端を側溝に切られている。残存部最大径



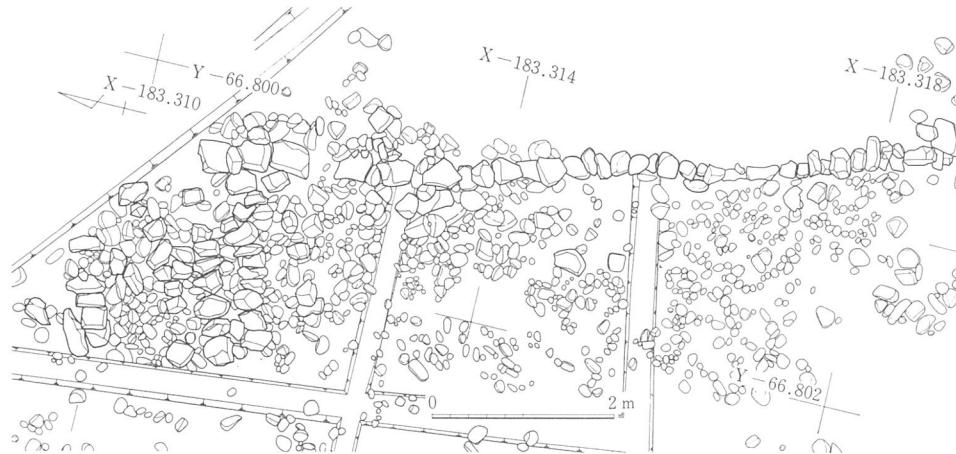
第25図 35-O O

は50cm、深さは最大で15cmである。埋土は明黄褐色(7.5YR5/6)シルトで、粗砂を若干含む。

遺物は瓦器・土師器の細片のみである。

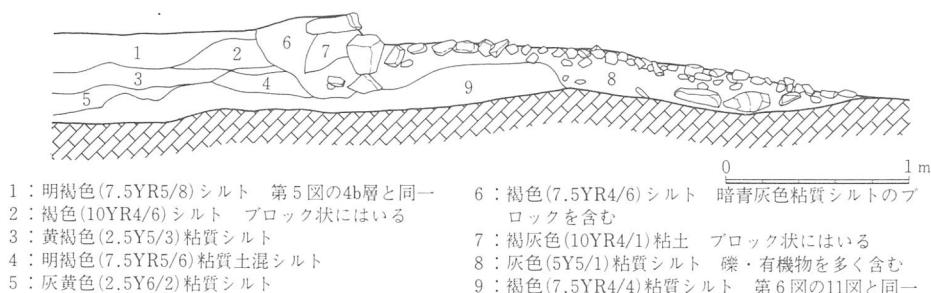
43-O Y (第26・27図、図版8~11) C18D Yに位置する、池状の遺構である。段丘崖の裾部が自然堆積した後、そこをさらに人為的に埋め立て、水際部分に河原石を積んで土留めとしている。この土留めの石列は、段丘崖にほぼ平行して築かれており、南西端は調査区外に延びている。この土留めの西側には水つきの粘質シルトが堆積しており、遺構全体としては、池状を呈している。

北東擁壁から約10m幅の範囲内では攪乱が著しく、旧地形が完全に損なわれていたため、本調査の際には石列の範囲および池状になっている部分の全容を明らかにすること



第26図 43-O Y

T.P.+28.00m



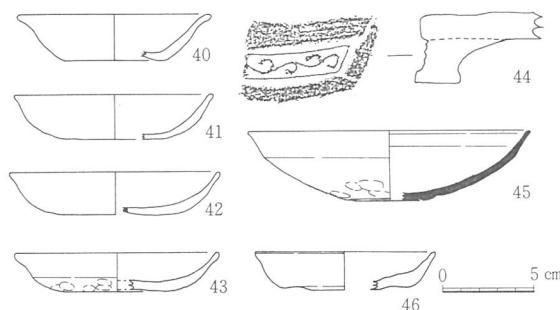
第27図 43-O Y断面図

ができなかった。しかし、泉南市教育委員会が行なった調査の際に検出した石組溝状の石列がこの土留めにあたることを確認した。この調査の際に、この石列は北東端が調査区外まで延びていたことが確認されている。それと同時に、先の調査の時点で、すでに部分的に石列が欠落している状態であることも確認されている。

検出した土留めは、30~40cm大の比較的平たい河原石および割り石を用いており、現存部は三段以内の積石から成る石垣となっており、現存高は、15~40cmである。遺構の南西端近くでは、この石積みを構成していたとみられる石が、遺構内に散乱している部分があり、石積みの遺存状態がよくない。ただし、この付近は遺物の出土量が多い。石積みの北側では、直径5~20cmの河原石が、明青灰色(5B7/1)粘質シルトをベースにして敷かれている。北に下がるにつれてシルト下層の段丘礫が表出し、人為的な石敷と連続する。遺物のほとんどは、石敷部分において検出している。

石積みの一部には、30cm大の比較的平たい河原石を用いて長方形の張り出しを作り出した部分がみられる。この張り出し部は、長辺が南北方向に2.2m、短辺が東西方向では2.0mの規模で、石積みは一段のみである。遺構内の埋土は、灰色(5Y5/1)粘質シルトで、張り出し部上面の高さまで堆積していた。ここからは土師質甕の破片が2点ほど出土しただけである。

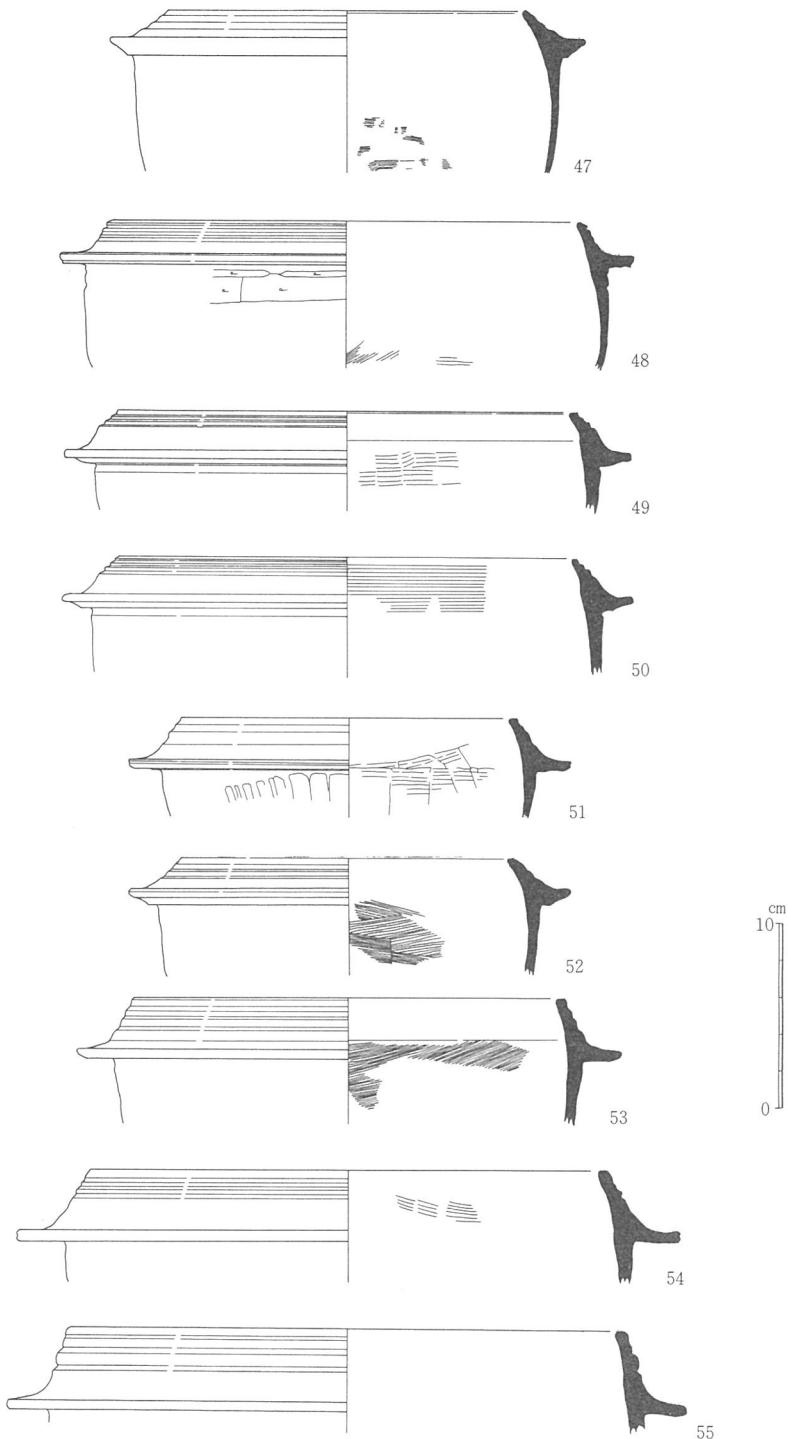
遺物は、ほとんどが石敷上面で出土した(第28~30図、図版14・15)。このうち、40~43は「根来の白土器」系の土師皿で、口径10.3~11.4cm、器高2.1~2.6cmである。40は底部がへそ皿のようにふくらむ可能性が考えられる。41は底部は平らで、体部は丸みを帯びながら内湾気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。42・43は、体部が底部から連続して丸みを帯びながらゆるやかに立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。44は軒平瓦である。圈線内に唐草文をもつ。45は口径12.8cm、器高2.7cmで、小型



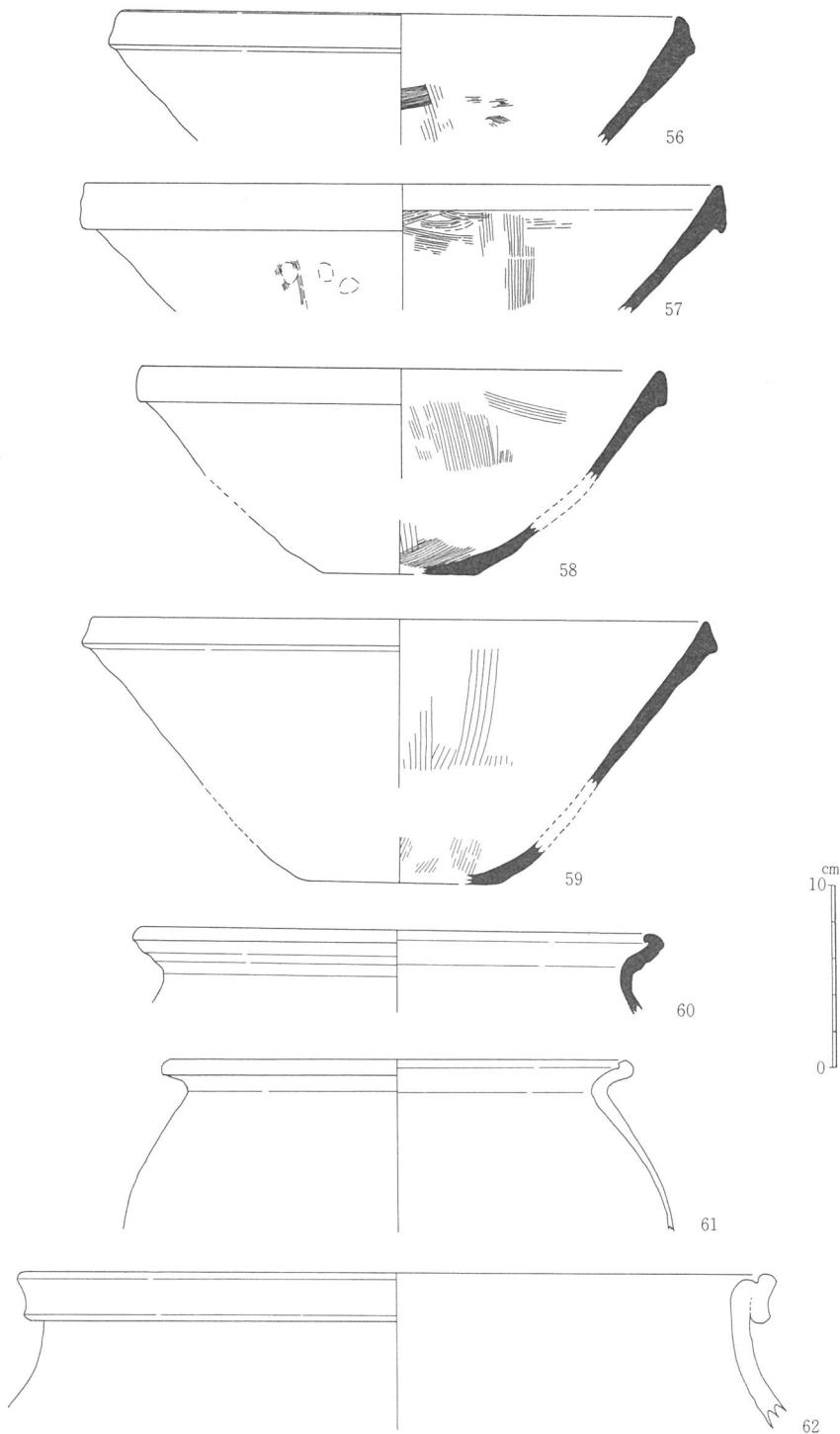
第28図 43-0 Y 出土遺物

化しており、高台もかなり退化してすりつけただけのものとなっている。46は土師小皿で、口径9.8cm、器高2.1cmである。

43-0 Y 出土遺物のうちでは羽釜および摺鉢の固体数が比較的多く、そのほとんどが



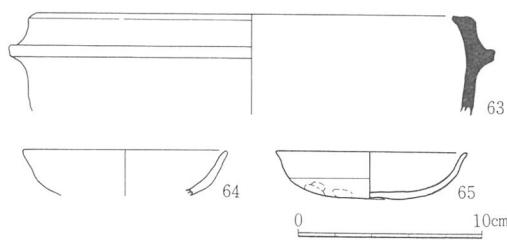
第29図 43-OY出土遺物 (2)



第30図 43-O Y出土遺物（3）

瓦質である。47～55は瓦質羽釜である。口径18.3～30.3cmで、47は外面は黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、胎土に白色砂粒を若干含み、内面体部にハケ目が残る。口縁は内湾しながら立ち上がり、外面には不明瞭な段を巡らす。口縁および鍔部の端部は丸く仕上げている。48は1mm以下の中白色砂粒を多く含み、外面の胴部以下はヘラケズリ、内面はハケ目を施す。外面は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈する。口縁は内湾しながら立ち上がり、外面には明瞭な段を巡らす。49は、鍔部の付近で口縁が軽く内側へ屈曲して立ち上がり、内面には明瞭な段を巡らす。50は外面は灰色（10Y5/1）を呈する。口縁の立ち上がりは49に類似している。48～50は、鍔部の端部を平坦に仕上げている。51・52は小型の羽釜である。51は白色砂粒を多量に含み、灰色（N4/0）を呈する。鍔部以下の体部外面はヘラケズリ、内面は一定方向のハケ目を残す。口縁は内湾しながら立ち上がり、外面には不明瞭な段を巡らす。51・52ともに鍔部の端部を丸く仕上げている。53は、鍔部以下の体部内面に不定方向のハケ目が残る。口縁はわずかに内湾しながらも直立気味に立ち上がり、外面には明瞭な段を巡らす。鍔部端部は丸く仕上げている。54は、口縁はわずかに内湾しながら立ち上がり、外面には不明瞭な段を巡らす。55は口縁が直立気味で、外面には明瞭な段を巡らす。54・55は鍔が長くのび、端部を平坦に仕上げている。

56～59は瓦質摺鉢である。口径28.7～35.0cm、復元高は、58が11.2cm、59が14.4cmである。口縁端部は明瞭に面をなしている。これらの瓦質製品以外に、須恵質の摺鉢の細片が一点出土している。60は土釜の口縁である。粗い白色砂粒を多く含み、口縁端部は内側に強く屈曲する。61も土師質の土釜と考えられる。胎土は精良で、体部の器壁は薄



第31図 43-0 Y下層出土遺物

師質小皿を検出している（第31図）。63は口径24.0cm、残存高5.4cmである。口縁端部は面をなし、鍔は短く、端部を平坦に仕上げている。64は口径11.3cm、残存高2.5cmで、「根来の白土器」の系統に属する土師皿である。65も同様の系統に属し、どちらも精選された白い胎土をもつ。

く、内外面ともに丁寧なナデを施している。これは紀州地域に類例の多いものである。口縁端部は内側に強く屈曲している。62は常滑の甕である。また、細片ではあるものの、青磁劃花文碗や白磁碗が出土している。

石敷の下からは土師質羽釜および土

## 第四章　まとめ

今回の調査では、集落址を明確にすることはできなかったものの、いくつかの中世の遺構を検出した。特に、B区において、先に泉南市教育委員会が検出した井戸のすぐそばで掘立柱建物を1棟、検出したことが注目される。この井戸は、出土遺物から14世紀後半に埋まったと考えられている。この掘方の埋土に、掘立柱建物掘方埋土と同じ土が混じることから、井戸と掘立柱建物は同時期に作られたと考えうる。井戸からは邪鬼を退けるまじないを記した木簡が出土しており、当時の民間信仰の一端をうかがわせる。また、段丘面上で検出した他の遺構の中にも掘立柱建物掘方埋土と同一の埋土をもつものを多くみうける。これらの遺構も同時期のものと考えうる。調査時点では削平が著しく、これらの遺構の性格を明らかにすることはできなかったが、谷部に近い段丘面の縁辺部に集落が営まれていた可能性を想定することができよう。

A区で検出した谷部は、金熊寺川の旧河道にあたる。調査の結果、この河道が流水作用によって扇状地を形成していたところを人為的に埋め立てていることが明らかになった。この谷部を埋め立てた層から出土した遺物は、13世紀中頃に属するものと、14世紀後半から15世紀初頭に属するものにはほぼ二大別できる。遺物の年代の下限から、15世紀初頭に現在の段丘面上部を削平して谷部を埋め立て、整地したと考えうる。その際に段丘面に存在した遺構および包含層が削平され、遺物や遺構埋土のブロックが谷部へ転落したのであろう。また、この整地層からは、わずかながら黒色土器も検出土しており、付近に平安時代後期に遡る遺構が存在する可能性もある。

谷部を埋め立てたうえで、旧河道の水を利用して池状遺構が築造されたと考えられる。さきに述べた整地は、この遺構構築のために行なわれている。ここでは、ほとんどの遺物が水辺の石敷上で出土している。遺物の多くは日常雑器で、人為的に投棄したと考えうるような出土状態を示すものは見当たらない。この点からみて、この遺構は生活の場として利用されていたと思われる。池状遺構は、敷石の下から出土した遺物から、15世紀初頭に作られたとみられ、さきに述べた整地の時期と一致する。

当遺跡出土遺物の中には、紀州地域とのつながりをうかがわせるものが多い。なかでも、いわゆる「根来の白土器」の系統に属する土師質皿が多くみられることが注目される。「根来の白土器」は、水簾して精選した胎土を用いて白く焼かれ、主に中皿と小皿の二種

に大別できるという特徴をもつ。当遺跡でみられる資料は、この特徴を備えている。ただし、中皿の器形は「根来の白土器」とは明らかに異なっている。すなわち、「根来の白土器」では底部から口縁部にかけての立ち上がりが直線的で急であるのに対し、当遺跡出土の中皿はこの立ち上がりが曲線的でゆるやかであるという違いがある。また、見た目の白さという点でも、前者ははるかに純白に近く、後者はあくまでも「根来の白土器」の系統に属するといえるだけで、「根来の白土器」そのものではない。両者の関連については、さらに検討を必要としている。

なお、段丘礫面で、一点ではあるが石匙を検出していることから、丘陵地ではすでに縄文時代からヒトが居住していたものと思われる。

＜参考文献＞

- 1) 村田 弘「紀伊国における中世土師質皿の法量変化について－中世土師質皿研究ノート（2）－」  
(『求真能道』1988年)
- 2) 村田 弘「根来寺における白土器の消長」(『和歌山県埋蔵文化財情報』17 1985年)

# 図 版

図版一  
遺跡全景





1. A区全景（東から）



2. B区全景（南東から）



1. A区土層断面



2. 段丘礫層上面遺物検出状況



1. 2-O B検出状況（北から）



2. 2-O B掘り上がり（北から）



1. 2-OBピット断面（北から）



2. B区土層断面（北西から）

4. 19-00



3. 18-00

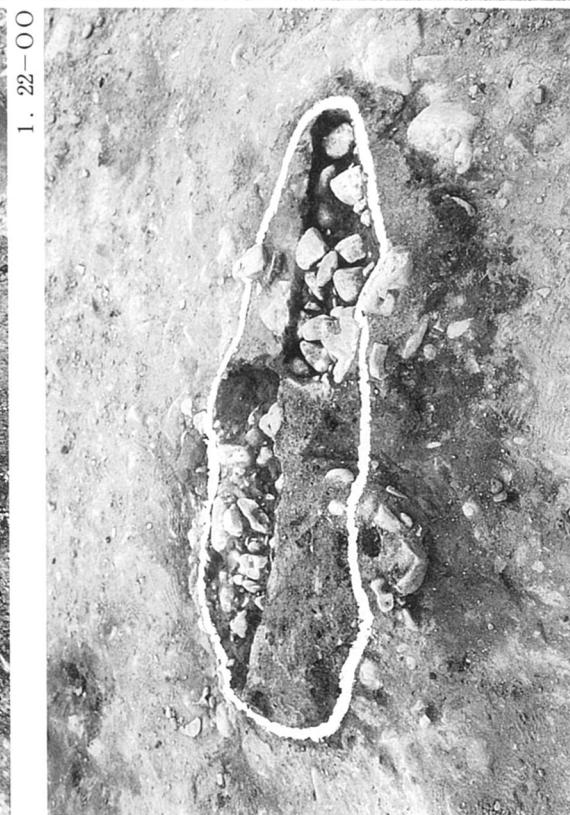


1. 6-00



2. 17-00



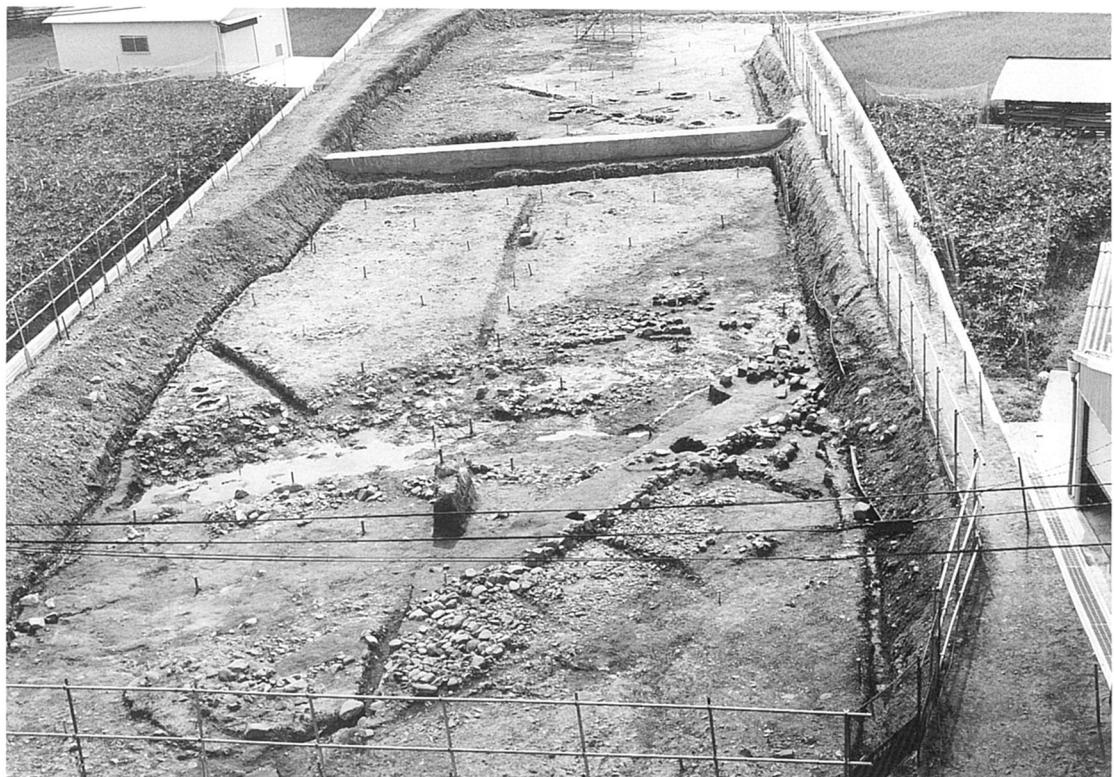


3. 31-00

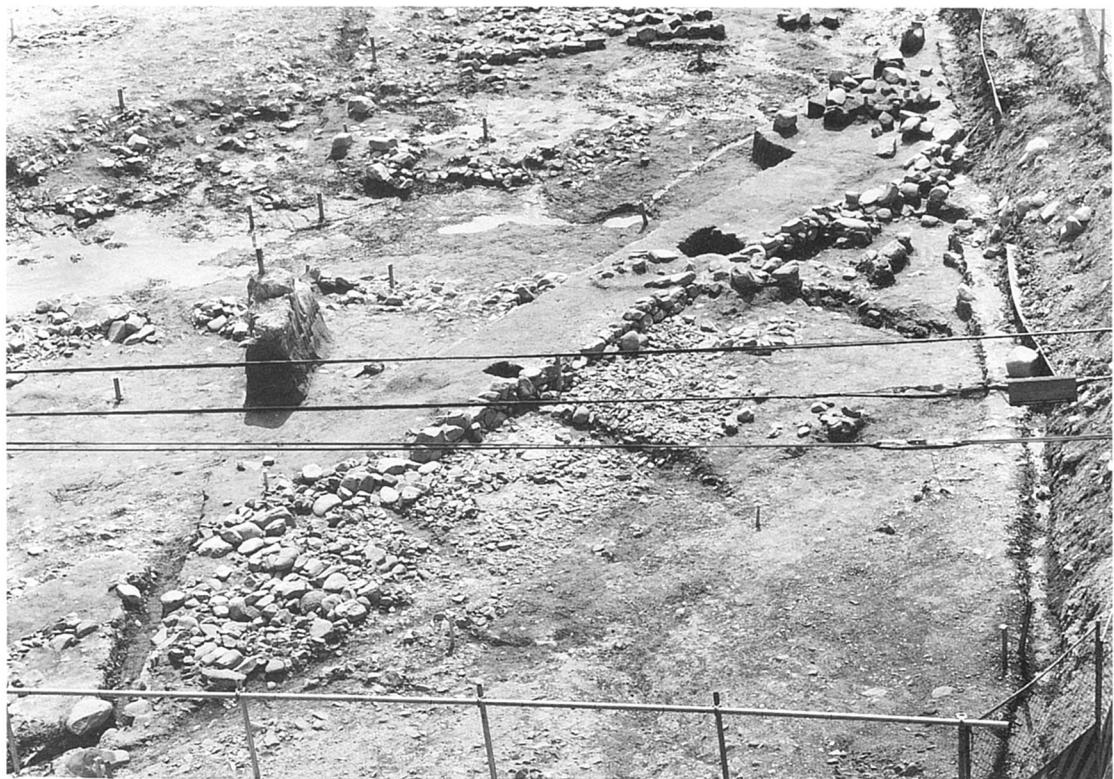
1. 22-00

2. 24-00

4. 35-00



1. 43-OY遠景（西から）



2. 43-OY近景（西から）



1. 43-O Y部分（西から）



2. 43-O Y張り出し部（西から）



1. 43-O Y石積みの状況（西から）



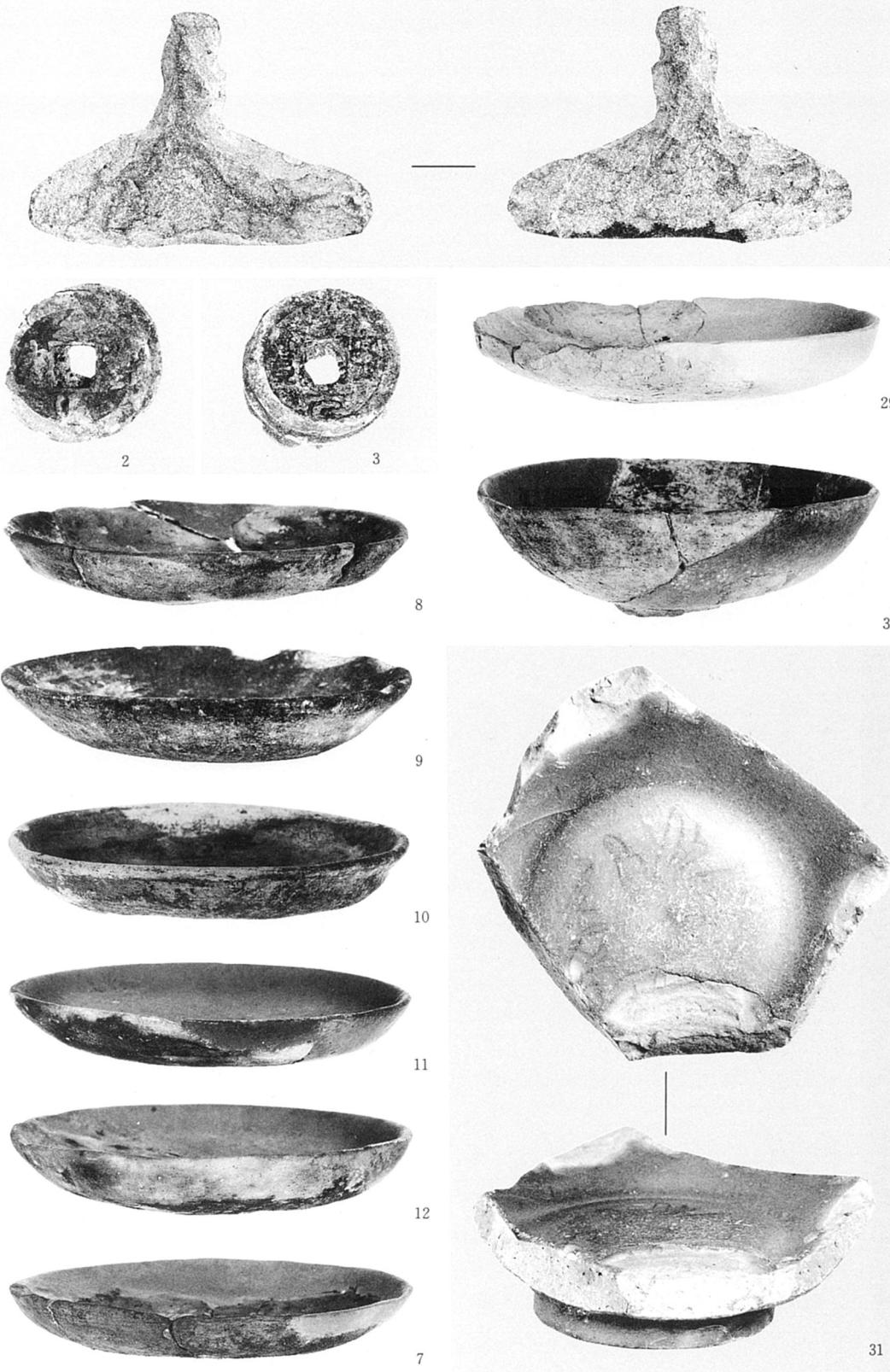
2. 43-O Y遺物検出状況（北西から）



1. 43-OY遺物検出状況（西から）



2. 43-OY石敷上面遺物検出状況（北から）



包含層出土遺物（1）



4



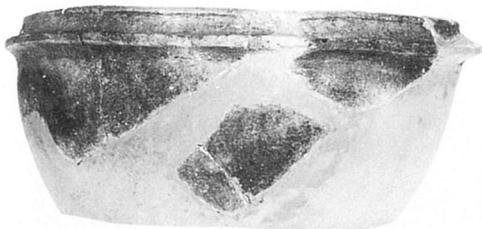
16



28



21



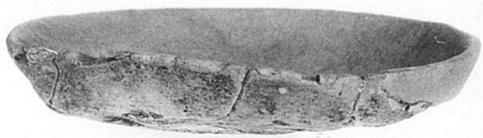
13



22



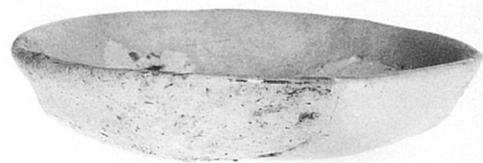
14



23



15



24



20



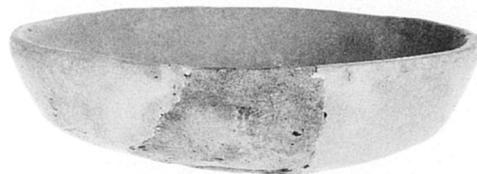
25



39



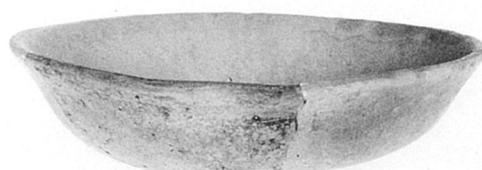
44



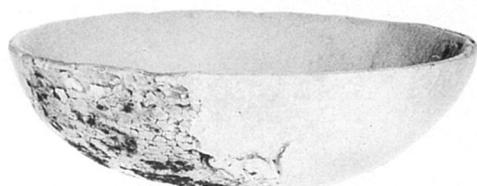
46



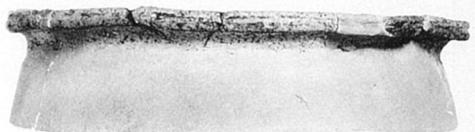
45



40



41



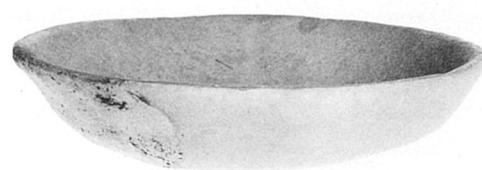
60



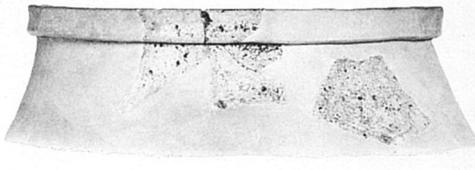
42



61



43



62



56



47



57



48



58



49



59



51



53



65

遺構内出土遺物 (47~59 : 43-O Y 65 : 43-O Y 石敷下層)

(財)大阪府埋蔵文化財協会報告書 第33輯  
主要地方道泉佐野・岩出線建設に伴う

## 岡 中 西 遺 跡

—発掘調査報告書—

昭和63年12月28日

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
大阪市東区谷町2丁目36番地大手前ウサミビル  
印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所